橋本ゼミ　教養プロジェクト・本（社会科学・思想）

３年　山上咲子

１.『正法眼蔵』道元、原著 1253 年、水野弥穂子校注（岩波書店、1990 年）

「心をもて学するとは、あらゆる諸心をもて学するなり。その諸心といふは、質多心、汗栗駄心、矣栗駄心等なり。」身心学道において道元は、心の修業とは、様々な心の核心に迫ることだと説いた。様々な心とは、草木などの形あるものから知識や経験など形のないものまでである。そうして俗世の諸相を知り、真実の生き方を悟るのである。

２.『歎異抄』唯円、原著 1300 年頃、川村湊訳（光文社、2009 年）

「弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生を助けんがための願にまします。」（1 章）これは、信仰は悪人を救うためのものであるから、仏は全ての人に対して差別なく手を差し伸べる。よって人は信じることだけに終始すればよい。だから、善いことをしようとしたり、自分の行いが善いことなのかどうかを考えたりする必要もない、ということを言っている。

「念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはべんらん。また地獄に落つべきにてやはんべるらん。」（2 章）この文は、念仏を唱えたからといって悪いことが起きないとは言いきれない。しかし、救われると信じることが大切だ。ただ、信じるかどうかの選択は自分次第だ、ということである。

「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」（3 章）これは、親鸞の言葉として有名な一文だ。一般的に、悪人が救われるのなら、善人が救われないはずはない、と考えられるだろう。しかしここでは、仏からの救いは、救いが必要だと自覚し信仰する人に対して与えられる。よって、他力本願の心を持たない人に救いが与えられなくても、それは仕方のないことだと言っている。

このように、『歎異抄』はさらなる高みのために背中を押してくれるようなものではないが、悪い行いをしたと感じた時や先行きの見えない時に慰めてくれるようなものである。

３.『老子』原著紀元前 6 世紀ごろ、蜂谷邦夫訳（岩波書店、2008 年）

「是を以て聖人は、其の身を後にして身は先んじ、其の身を外にして身は存す。其の私無きを以てに非ず耶。故に能く其の私を成す。」（7 章）とは、聖人は、自分のことよりも相手のことを優先する、それが聖人たる所以なのだ、ということを言っている。

「之を生じ之を畜い、生じて有せず、為して恃まず、長じて宰せず。是れを玄徳と謂う。」（10 章）つまり、奥深い徳とは、自分が与えたとしてもその見返りを求めないことなのである。

「吾れ、是を以て、無為の益有るを知る。不言の教え、無為の益は、天下、之に及ぶもの希なり。」このように、老子は、無為の重要性を説く。人々は、ものごとに対して意見を言

い、難しい易いや美しい醜いなどの評価を与えようとする。これが偏見につながり争いが始まる、ということだろう。確かに、何もないことは、争いを生まないが、良い出来事ももたらさない。人々は向上心を持ち、世の中の発展を目指すべきでないか。たとえ争いが起こったとしても、それを乗り越えた先に新しいより良い世界があるとすれば、程度の差こそあれ、世の中には避けて通れない争いがあるとも考えられる。老子にとっては、そのような争いでさえも、無為に比べれば価値のないものになるのであろうか。

４.『努力論』幸田露伴、原著 1912 年（岩波書店、1940 年）

露伴は、「自ら新しい自己を造らんとすることは実に高尚偉大な事業であって、たといその結果は甚だ振るわざるにもせよ、男らしい立派な仕事たるを失わぬのである。」（44 頁）と述べる一方で、「努力は功の有と無とによって、これを敢えてすべきやいなやを判ずべきではない。努力ということが人の進んでやむことを知らぬ性の本然であるから努力すべきなのである。」（23 頁）とも述べている。つまり、努力が結果に結び付くとは断言できないが、努力することに価値があり、人は努力し続けるべきなのだ。それは、もちろん自己のためでもあるが世のためにもなる。現状に不満を持ち、未来を変えようという意思が必要である。また、他力、自力という言葉があるが、これらは明確には区別できない。なぜなら、他力において「信じる」ことは自己の力であり、また、自力において「知識」を身に着けることは他の力を借りることともいえるからである。その上で、人々は自ら行動し、自己を変えようとする努力が必要なのだ。

５.『自省録』マルクス・アウレリウス、原著 180 年ごろ、神谷美恵子（岩波書店、1956 年）

「波の絶えず砕ける岩頭のごとくあれ。岩は立っている、その周囲に水のうねりは静かにやすらう。」「君に起こったことが君の正しくあるのを妨げるだろうか。また広やかな心を持ち、自制心を持ち、賢く、考え深く、率直であり、謙遜であり、自由であること、その他同様のことを妨げるか。」（69 頁）アウレリウスはこのように、人生における忍耐の必要性について説く一方で、次のように人生のはかなさについても述べる。「吹きたる風のまにまに地の上に撒き散らさるる木の葉にも似たるは人のやからなるかな。」（205 頁）人類はみな木の葉のような存在であり、風によって吹き落とされ、また新しい存在が生み出されるのである。

６.『パンセ　上』パスカル、原著 1670 年、塩川徹也訳（岩波書店、2015 年）

「逆境に打ちのめされているとき、外界についての学問は、道徳についての私の無知を慰めてはくれないだろう。しかし生き方について学問は、外界の学問についての私の無知をいつでもほめてくれるだろう。」（47 頁）このようにしてパスカルは学問のむなしさを述べた。人間が生きていく中で、手に負えない道徳的問題に出会ったとき、学問的な知識は役に立たないが、道徳的心得は学問的無知をかばうという。

７.『ファウスト　第一部』ゲーテ、原著 1831 年、相良守峰訳（岩波書店、1958 年）

ファウストはゲーテが生涯をかけて残した作品である。学問の無力さに関してこのように記述されている。「それは君が心から感じていて、自然と肺腑から迸り、底力のある興味でもって、すべての聴衆の心をぐいぐいと引き摺るのでなければ、君の言う目的は達せられないね。」（44 頁）として情熱の重要性を述べる一方で、「人間精神のあらゆる宝をかき集めてみたが、結局こうして坐ってみると、何ら新しい力が湧いてこない。」（122 頁）「理性だの学問だのという人間最高の力を軽蔑するがいい。偽りの精神の動くがままに、妖術や魔法の道で元気をつけるがいい。」（124 頁）このように、焦って努力した結果、現実の楽しみを見逃しているという。

８.『大学教育について』J.S.ミル、原著 1865 年、竹内一誠（岩波書店、2011 年）

ミルは青年時代の勉学の究極の目的として、「自分自身を『善』と『悪』との間で絶え間なく繰り返されている激しい闘争に従軍する有能な戦士に鍛え上げ、人間性と人間社会が変化する過程で生じて解決を迫る日々新たな問題に対処しうる能力を高めること」（132 頁）であるとする。人生をより価値あるものにするための手段である知識や教養を、青年期に大学で身に付けるべきなのである。

一般教養としては、考えることを学ぶための科学教育と、考えたことを表現するための文学教育の両方が必要である。他の学問分野を排除して、専門分野だけに没頭することは、人間の精神を偏狭にし、幅広いものの見方を不可能にする。文学においては、疑うこと、困難なことから逃げないこと、矛盾や混乱を看過せず否定的批判により吟味することが大切だ。科学においては、真理を探求し、絶えず何が真理であるかを知ることが大切で、そうでなければ、結果を誤るか、一般大衆は「大ぼら吹きや詐欺師に騙されてしまう愚か者」（60 頁）になってしまう。さらに、芸術も一般教養の一つとして、「我々の本性の非利己的な側面に訴え、われわれが属している制度の幸不幸を直ちに自分自身の喜びや悲しみとするそういう人生の一場面一場面を我々にもたらし」（125 頁）、人生を真剣に考える機会を与えてくれる。

９.『種の起源　上』ダーウィン、原著 1859 年、八杉龍一訳（岩波書店、1990 年）

ダーウィンは生物の生き残りをかけた生存闘争について、「生活のために闘争し大きな破壊をこうむらねばならない」、「この闘争を考えるとき、自然の闘いは間断のものではないこと、恐れは感じられないこと、死は一般に即刻のものであること、そして強壮で健康で幸運のものが生き残り増殖することを、完全に信じることによって、自分を慰めることができる。」（109 頁）と述べる。競争社会の厳しさを訴えかけるものである。

また、自然界における人間の存在について次のように述べる。「人間の作り出したものは、〈自然〉が全地質時代を通じて集積してきたものと比較してみたとき、いかに貧しいものに

すぎないことか。」「〈自然〉の産物は人間の産物よりもはるかに〈本物の〉性質を持つはずだということ、また自然の産物はもっとも複雑な生活条件にたいして無限によりよく適応しており、明らかにはるかに高度の技能の刻印を持っていることを、うたがうことができるであろうか。」（116 頁）このように、人間存在の小ささについて、自然界では我々の知らないところで様々な変容が起きていることを述べている。

１０.『菊と刀』ベネディクト、原著 1946 年、角田安正訳（光文社、2008 年）

外国人から見た、日本人の不可解な国民性について研究されている。「菊も刀も、同じ日本像の一部なのである。日本人は攻撃的でもあり、温和でもある。軍事を優先しつつ同時に美も追及する。思いあがっていると同時に礼儀正しい。頑固でもあり、柔軟でもある。従順であると同時に、ぞんざいな扱いを受けると憤る。節操があると同時に二心もある。勇敢でもあり、小心でもある。保守的であると同時に、新しいやり方を歓迎する。他人の目を恐ろしく気にする一方、他人に自分の過ちを知られていない場合でもやはり、やましい気持ちにかられる。兵卒は徹底的に規律を叩き込まれているが、同時に反抗的でもある。」（15 頁）日本人特有の「恩返し」や「恥」といった観点から考察されている。